

平成21年 6月 10日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18530400

研究課題名（和文） <間>の文化に関する社会学的研究

研究課題名（英文） A Sociological Study of “Ma(interval)”

研究代表者

伊奈 正人（INA MASATO）

東京女子大学・文理学部・教授

研究者番号：40176384

研究成果の概要：

「間」の文化とかがわる日本文化論的な知見などを整理・総括し、その上で「間」を動的関係のなかでの個の存在感＝触覚的な手応えの問題として規定した。そして、「間」を、若者の生の実感＝柔軟さと頑なさの弁証関係の問題として仮説化し、事例調査を行った。若者が自己の生をどのように「シンボル化」して概括しているか、若者の「間の語彙」、その批評性に着目し、そこに「間の美学」を読解しようとしたことが特徴的成果である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	330,000	2,130,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：若者文化・下位文化・日本文化

1. 研究開始当初の背景

本研究の前提となっているのは拙著『サブカルチャーの社会学』（世界思想社）および科学研究費基盤研究「サブカルチャーの「サブ-メイン構造」の「融解」説と「多極化」説」である。若者文化の「融解」を指摘した山田真茂留氏の知見に依拠しながら、かつての対抗的な下位文化としての若者文化が人口に膾炙し、若者文化のスタイルがメイン化され、若者文化が文化としての実体を喪失してい

る状況を確認した。

そのうえで、サブカルチャーはかつてのように若者文化と同義といってもよいものではなく、障害者文化、高齢者文化、地方文化などのように多元化していることを事例的に解明し、また理論づける試みをした。

2. 研究の目的

では、翻って若者文化それ自体の現状はどう考えたらよいのか。若者文化というものは、

もはや文化として成り立たないのか。このような問いかけを行ったことが本研究の出発点である。

「融解」説の知見は、一方で、パウマンやベックの知見を参照しつつ、自己アイデンティティを包絡する中核的な価値や構造的な枠組を喪失している現代若者文化に対する批判を行う。それとともに、他方で、セネットやギデنزの知見を参照しつつ、フレキシブルで可変的な自己の困難を直視し、その条件を探求するものだった。

こうした知見を前提としながら、本研究は現代の若者文化が胚胎している新しい文化の価値と構造について明らかにしようとするものである。

しかし、若者文化は否定的に評価されることが多い。たとえば携帯電話に代表されるような独自の自由さや柔軟さの構造的実現があるという立場に立つ場合も、ギデنزやセネット、あるいはホネットが指摘するような「柔軟が故の隘路」(＝柔軟さや可変性が「生きづらさ」をもたらす)という問題がある。

そこで、本研究では、可変的な構造ではなく、若者文化の積極的評価の核となる文化的価値に着目した。しかし、それは、仮に存在しているとしても、顕現しているものではない。そこで、若者たちの文化を、より身体的な「構え」(attitude)にまで遡及し、その資源的な意味に注目すべきであるという考えに立った。そして、若者の資源的な意味の遡及的考察を可能にする視点として「間」の文化を提起した。

一方で、「間」の文化についての社会学的視点を理論的に明らかにする必要がある。伝統的な日本文化論などの読解の上に、「余白」「あいだ」、さらには社会的意味形成と関わる「場」、そして社会学的な「想像力」の概念について考察を行うことが本研究の第1の目的である。第2に本研究は、こうした「余白の文化」「あいだの文化」の例解として、事例的な調査研究を行うことを目的とする。

若者のコミュニケーションに胚胎されている「何か」は、なかなか新しい文化として同定しがたいものがある。しかし、文化としてやがて認知され、多くの人に共有されるに至った60年代の若者文化にしても、当初はまったく理解しがたいものとして論難されることもしばしばであった。しかし、そのなかに何か新しいものが胚胎されていることを感じ取り、古い語彙、古い枠組で語るうとした人もいたことも、忘れてはならない。たとえば、三島由紀夫は全共闘を否定しながらも、そのなかにある可能性を「カリカチュア的能力」として括った。同様の試みは、現代の若者についても可能なはずである。

3. 研究の方法

「間」の文化については、日本の伝統文化・芸能から、日常生活文化・人間関係にいたるまで、広範な問題と関わり、考察が行われてきた。ところが、ほとんどが、「間」を日本文化として考察してきたと言っても過言ではない。「間」の文化は、日本的な社会構造、人間関係、言語文化などと密接に関わるものとして論じられてきた。とりわけその背後にある日本的な宗教的な世界観は決定的なものであると考えられ、「間」はどこかで「非日常的なもの」とつながっていると考えられてきた。よって直ちに若者の「間」などと論じることは、いささか暴論の誹りをまぬがれない。

理論的には、象徴的相互行為論の視点をベースに、調査の視点を理論構成する方法をとった。G・H・ミードから始まるこの学派は、上でも述べたように、身体的な「構え」(attitude)にまで遡及し、ことばと言葉のやりとりからなる意味世界の問題をとらえようとした。

本研究において、鍵となるのは、人間有機体の生理過程における反応、身体化された構え等々を、シンボル化して把握する視点である。ケネス・パークやミルズはこのシンボル化という人間の能作に注目しながら、批評の方法、社会心理学の方法を形成した。このシンボル化の語彙に着目する視点を中心に間の文化をめぐる議論を整理することで、「間の語彙」という調査のための視点が開示されると考えた。

ミルズやパークの議論は、反省的な異化に着目する議論である。「間の文化」は、中井正一によると、時空の流れにおいて、一定の偶然的な配列により、美の光芒が生じることに注目する視点である。それを表現する語彙の能作に注目することで、「間」という神秘的な現象の社会学的な考察が可能になるというのが、本研究の基本的な方法態度である。

「間の語彙」の抽出それ自体を事例的に行う方法を考えると、質的な聞き取り調査が妥当な方法として浮かび上がる。生活史調査の方法を用いて、反復して聞き取りを行う方法により、調査を行った。

4. 研究成果

本研究の基本視点である「間の語彙」を論を考えてゆく手がかりになった理論的な論点をまず整理し、そのうえで事例研究の成果を要約的にまとめておく。

(1)「不足主義」と「間」「余剰」「余韻」「余白」

「間」の文化に関する論考は数多い。社会学的な議論としては、南博のそれが、とりわけ重要である。南を中心とした「伝統芸術の会」は、1979年に『現代のエスプリ』特集「い

き、いなせ、間」のなかに研究成果をまとめ、さらに1983年に総括的な論集南博編『間の研究』（講談社）を公刊している。

『間の研究』は、生活の間、芸術の間にかけて、体系的・網羅的に「間」についての論考を編集している。心理、身体、礼法、拍子、リズムから、歌舞伎、落語、舞踊、音楽、絵画まで、それぞれの専門家が論を展開している。このうち、南自身は、総論部を執筆し、社会学・社会心理学的な知見に基づき、問題を整理している（南[1983:7-20]）。議論のベースになっているのは、中井正一の関係主義の美学、時間論、武智鉄二による、「間」と魔、魔とキメなど、「間」同定と関わる問題である。」

これをまず見ておこう。南博の提示する論点は三点である。まず第一に、「間」は日本人に独特の文化であるという論点。「間」の文化を、南は、自著『日本人の心理』（岩波新書）の「不足主義」「充足主義」という対立概念を使って説明しようとする。仏教が日本的に展開されることで、無常観とからまる「不足主義」が成立した。その代表がたとえば『徒然草』である。それは、芸術意識としての「余剰」「余韻」「余白」などの美を生んだ。それが、音楽や演技の間、武道の間などと結びついた。それらが、宗教観念と分離することで、日本文化としての「間」、生活文化としての「間」が生まれた。以上が、「不足主義と間」についての、南の説明である。こうした「不足主義」の文化に対して、合理主義の「理詰め」で、「間」を埋めてしまうのが、西欧文化の「充足主義」だと南は言う。

第二の論点は、日本人の生活意識のなかで、対人関係、心理的な距離が、関係調整において重要であったということ。位置どり、距離のおきかた、そういった場合の「間」は、「程(ほど)」という言葉であらわされた。「程がよい」というのは、「間がよい」ということになる。そう南氏は言う。これは、「間」の内容的実体をあらわすものである。

第三の論点は、時代の変化で、「間の文化」はどうか変わるかということ。「間」が時代・世代を超えてどう引き継がれ、変化してゆくかという「間の変容」の問題。これは日本人の人間関係がかわればかわってゆかざるをえないというのが、南の解釈である。生活近代化の宿命として、「理詰め」になり、「間」を詰めてしまうことも多くなり、「間」も程もなくなっていくかもしれないということ。ただ、南は、宗教的な「間」と結びついた、スポーツや芸術の「間」は、非日常的なものであるが故に、日常的な変化を超えて、一層のソフィスティケーションがなされるのではないかと言う。

「理詰め」とは、原理原則をたて、論理的に論じつくすことであろう。このような西欧

文化観は、ひとつのステレオタイプでもあり、そのような方向に日本人の人間関係が変わりつつあるという判断は、若者の「ことばの能力の喪失」が喧伝される今日からすると隔世の感がある。しかし、このような日本と欧米の対比図式が、一時代敗戦した後進国日本に手本を与えていたことは事実である。南氏の議論は、そのような時代背景における人間関係の変化を視野に入れつつ、「間」の文化に明解な対比スキームを提示したものである。

このように南博は、1)比較文化的視点、2)「間」の同定の問題、人と人との関わり、関係性の問題、3)歴史的視点の問題の3つに問題を整理している。

(2) 生の手ごたえ 「クールな文化」と「触覚文化」

南博の整理は、「間」の文化社会学の基本的な構成を指摘したものであると言える。しかし、歴史的变化の認識において、時代的な制約、近代化論という制約のなかにある。

上では日本の近代化という認識の制約について述べた。これに加えて、西欧文化の現状が合理的な「充足主義」であるという見地にも、一定の疑問を提出しておく必要があるだろう。東洋文化を評価する思想、芸術思潮は、それなりの歴史を持っている。

文化社会学の流れのなかで見れば、「充足主義」の優位というものは近代化論のなかで提示された図式なのであり、今日においては別様の見地がむしろ優位になりつつあるとすら言えると思われる。ここで新しい文化社会学として念頭に置かれているのは、亀山郁夫他編『文化社会学への招待』（世界思想社1992）の諸論考、太田省一編『分析・現代社会 制度・身体・物語』（八千代出版1997）の諸論考、さらには北田暁大らの議論である。

共通する出発点には、ジンメル議論がある。ジンメル議論の文化論は、両義性の理論である。19世紀的なコンテクストのなかで、ジンメルは一方で、公衆や、健康や、衛生、あるいは男性性といった、括弧つきの「正常なもの」を問題にした。他方で、群衆や、病いや、退廃や、性的なもの、あるいは女性性といった、精神や社会の括弧つきの「異常なもの」を問題にした（太田前掲書）。ジンメルはさらに様々な形式の両義性を考察している。そして、両義的なものの不安定であやうい均衡を描いた。こうしたジンメルの視座は、20世紀におけるケネス・パークの両義性論や、バフチン的なポリフォニー、さらにはフォーコーやルーマンや構築主義の議論と共鳴する。

こうした議論の出発点でもあるジンメルが論じた文化表象論、「非合理的なもの」等々

のコンテクストの発見は、別様のリアリズムを提起するに至った。見田宗介氏は、キュービズムやミニマリズムにその例を求めている。同様の議論としては、新井満の「引き算芸術」論がある(新井『そこはかとなく』1997)。新井は「充足主義」の芸術観を「足し算芸術」と呼び、これに「引き算芸術」を対置した。それは、不要なものを極限的にのぞいてゆき「余白でそとつつむ」ような表現法である。新井は、「引き算芸術」=日本文化という等値はせず、むしろ西欧文明のなかのキュービズム、ミニマリズムという思潮、そのコンテクストにあるサティに「引き算芸術」を代表させていた。さらには、オキーフの絵画なども、新井は同様の文脈で整理している。

こうした「不足主義」の文脈で、マクルーハンの「クール」という概念を論じることも可能であろう。これは、「論理的な塗り込み」の減少=「クールダウン」という世界観である。これによってテレビ文化は肯定され、さらにこの見地はインターネット化の分析、若者のコミュニケーションの分析にもさかんに用いられている。すなわち、デジタル社会のリアリティや、若者言葉の分析などである。ここから、若者的な行動である、ザッピング(テレビのチャンネルをしきりにかえてみる)、ワン切り(携帯のワンコールで「気にかけているよ」と意志を伝える)、絵文字なども考えてゆくことができるはずである。

マクルーハンは、こうした考え方を『メディアの法則』でさらに発展させた。この著作のなかでマクルーハンは、「間」(interval)という考え方を提起している。そして、「不足主義」に基づいた「間」の文化を「触覚文化」として特徴づけている。これは「充足主義」の文化との対比において、提起されている視点である。対比とはいえ、単線的な進化を読むための概念装置ではなく、一定の自在の獲得は一定の不自由の獲得であり、一定の不自由は別様の自由の保障である、というような両義的な視点が、マクルーハンのなかにはある。と同時に、「触覚文化」を介した「不足主義」の美学という問題は、若者の「生の手ごたえ」といった視点を提供するものである。

(3) 両義性と想像力 シンボル化と異化
こうした「生の手ごたえ」をめぐる若者の言語実践を観察することが、事例研究の課題となる。その際、「間の語彙」によるシンボル化に着目する本研究は、ミルズやケネス・パークらの「動機の語彙論」に注目し、検討を行った。

この視点は、行為の動機を、人間の内部の原因に求めるのではなく、事後的に付与される語彙であると考えられる。そして付与の状況、付与のルールを観察することを眼目とするものである。

行動心理学的に言えば、動機は刺激-反応の複雑な連鎖である。この連鎖は逐一説明されることはなく(=「おおまか」に)、パターン化された語彙により瞬時にシンボル化され、解釈、説明される、とパークは言っている。

こうしたシンボル化する語彙によって、一つの「間」が異化され、同定される。

パークの『恒久と変化』(1935)は、「あらゆる生の作品性」という観点から批評概念を社会的に拡張した著作である。批評の方法は、「訓練された無能力」のように、ある単語(「訓練」)を、不敬だが啓示的な文脈(「無能力」)へと変換し、隠喩化すること=同書の鍵概念「不調和によるパースペクティブ」である。隠喩は、「作品としての生」の動機=モチーフを批評する際に用いられる「喜劇化」の方法である。あらゆる隠喩の洞察はそのなかに固有の盲点を含む。一定の変換は、一定の可能性から隔離する。パークは、動機を単一の隠喩に変換・還元するのではなく、隠喩を重ね、多元的に類型化する「批評の批評」を提起した。

両極端の意味をもつことばを対置するオキシモロンという修辞法がある。ミルズは、ヴェブレンの修辞法(「訓練された無能力」など)やケネス・パークの「不調和によるパースペクティブ」論から学び、この手法を多用した。対極を示すことで想像力は活性化する。極端な形態を考えたり、まったくの反対物をも想定したりすることで、いささか不敬ではあるが啓示的な判断が得られる。

あらゆる洞察はそのなかに固有の盲点を含む。一定の変換は、一定の可能性から隔離する。たとえばお金、権力、イデオロギーなどは、問題をあざやかに変換する。しかし、フェティッシュに暴走することで、他の解決は隔離される。そこで、パークは、問題の一元論的解決を危惧し、「喜劇、滑稽化」によるレトリック戦略を駆使した。ヴェブレンは、激しいことばで偶像破壊を続けた。ミルズの著作の狙いも、こり固まった状況判断を変化させることだった。多元的国家 アメリカにおいて権力一元化は想定外のことだった。そこで、『ホワイトカラー』は、「変だ」と不安を感じながらも、消費生活を享受し、陽気に楽しく暮らすアメリカのホワイトカラーを描き、公衆とはほど遠い「陽気なロボット」であると批評した。ミルズは、自ら表紙の写真で戯けてみせ、ウィットに富んだ筆致で「不安なアメリカ人」を描いた。『パワーエリート』は、多元的に機能分化することで巨大な可能性を獲得する一方で、権力集中が盲点となっているアメリカ社会を描いた。ミルズの「人間喜劇」(バルザック)は、ファシズム社会とアメリカ社会の類似を戯画化し、状況判断の変更をうながすものであった。

こうした異化作用を行うものとして、ミルズは「社会学的想像力」の概念を提示した。ミルズは社会学的想像力は、すべてを一掃し、一色に塗り替えるようなものとは正反対のものであった。ミルズの言説は、対極を一色に塗りつぶすような言説に対極の言説をぶつけ、「間(あいだ)」への注意を喚起するものであった。ミルズは社会学的想像力は、比喩的な表現を用いて言えば、真っ白な液体に薄墨を流し込んで、できたマーブル模様の微細なところまでも記述し、そこに浮かび上がるイメージから、社会や人間に対する深い洞察を得ようとするようなものであった。

身分から契約へ、という変化は、単線的な進化をもたらすものとは限らない。自在の獲得は、不自由の獲得と裏腹である。契約によって人材が効率的に配分されることで、あらゆる身分、地域に散らばっていた人材が合理的に配分される。こうした民主化は、上下関係の徹底と読むこともできる。

同様に若者に関わる否定的変化のなかに、積極的な徴候、新しい文化の萌芽を読み取ることもできるはずである。自在さと孤立化の裏腹を洞察した上で、新しい可能性について読解する視点は、ギデンズの純粋な関係性といった議論と関わらせて考察することも可能であろう。

(4) 事例研究

事例分析の方法的ヒントとなったのは、若者のワーカーホリック論を展開した阿部真大が北村文と著した『合コンの社会学』(光文社新書)である。同書においては若者の生を観察したあとに、可能態として「少しだけずるく生きる」という文言、「間の語彙」の抽出=シンボル化を行っている。若者自身の生のなかに、このような語彙=「間の語彙」を読解することが、調査の基本視点となった。そして、純粋頑なに理想を追い求めること、ずるく柔軟に生きること、というふうに表示される生のあり方を表現する語彙、若者の可能性、新しい若者文化の萌芽などを視点としながら、数例の事例を調査した。

事例的に明らかにしたのは次のことである。エスニックマイナリティ、貧困、障害といったスティグマを持つ人々のなかに、理想と「メシを食うこと」のおりあいをつけながら生きていっている人がいること。音楽という夢追的な生を生きようとしている若者のなかに、「少しだけずるく生きている人」=「楽器の職人」として生活を成り立たせながら音楽活動をしている人、音楽活動と他の生活のおりあいをつけながらマルチに活動している人がいること。

たとえば、高等教育が大衆化された時代において、大学進学は一つの憧れであり、夢追的な渴望の対象であった。見田宗介『まな

ざしの地獄』(弘文堂)は、そうした渴望から犯罪へと追い込まれてゆく青年 NN の姿を描いた。ほぼ同年代のエスニックマイナリティをもった在日韓国人は、NN ほどの自由もなく、職を転々とすることもできなかった。可能な職業に就きつつ、NN が刑務所に入ったあとに読んだ本、語った思想などを、仕事と両立させながら、生きていった。「とりあえずメシを食う」という語彙は、そういう歴史的な状況と照らし合わせるときに、新しい若者文化への可能性を暗示しているように思われた。

「食べてゆくこと」という語彙を基本にししながら、高円寺や下北沢、三軒茶屋などの音楽シーンを調査することで、音楽をすることが、単なる「夢追的な営み」であるばかりではなく、別様の可能性を持ったものであることが明らかにされた。例えば音楽と学業を両立させている生き方、サポートミュージシャンという生き方、イラストレーターなどとの両立を行っている生き方、等々がそうした例としてあげられる。

なお事例研究は未刊であり、詳細は今後の調査にゆだねられる。その際肝要なのは、「ずるさ」「したたかさ」「現実性」などといった紋切り型の語彙で自らを説明するのではなく、独特の「間」において語りが行われていることである。

例えば、「どうしても売りたい」「ピックになりたい」というのが旧世代の語りであるとすれば、「売れることを拒否したりはしない」「結果として売れるかもしれない」「例えば、誰々のベアシスト、といった売れ方をしたい」といったかたちで、人生の目標が語られている。しかも、旧世代の人々や、調査場面において、対抗的な姿勢で性のスタイルを提示するのではなく、「おりあい」をつけて説明するという「構え」が読み取られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

伊奈正人「間の文化再考 一つの序説的ノート」『経済と社会』33号 2005年 pp.1-22 査読なし

〔図書〕(計 3 件)

小出正志、伊奈正人他編『アニメーション事典』(朝倉書店)「サブカルチャー」「トレンド」(近刊)

井上俊、伊藤公雄、伊奈正人編『社会学ペイシックス』(世界思想社)「ミルズ『社会学的想像力』」(近刊)

伊奈正人・中村好孝『社会学的想像力のために』(世界思想社)2007年、330p

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊奈 正人 (INA MASATO)

東京女子大学・文理学部・教授

研究者番号：40176384

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし